

日本のバスケットボール競技におけるクリスクロスの 採用過程に関する研究 (1920年代)

小 谷 究 (流通経済大学) *

A Historical Study on the Adoption of the Crisscross in Japanese Basketball (1920s)

Kiwamu Kotani (Ryutsu Keizai University) *

(2020年3月13日受理)

Abstract

This research focuses on the crisscross play in the Japanese basketball scene and outlines the offense tactic needed in Japan right before the crisscross play was adopted and aims to clarify the adoption process of it.

The study results can be summarized as follows.

The background as to why there was excessive use of long shots in offense tactics in Japan in the mid-1920s prior to the adoption of the crisscross play lay in the inability to adopt an offense tactic that uses a lot of dribbling due to conditions of the ball and court. This seems to have led the then Japanese team to adopt an offense tactic that does not require the players to dribble too much in order to take the ball near the goal.

At that time in America, the coach of the Wisconsin University, Walter E. Meanwell published THE SCIENCE OF BASKETBALL and introduced an offense tactic that does not require four players to dribble too much in order to take the ball near the goal, exactly the kind of tactic sought out in Japan. The Japanese basketball association group was using the tactics listed in THE SCIENCE OF BASKETBALL as a reference, so they acknowledged the crisscross technique through this publication.

Afterwards, the crisscross technique was introduced in numerous manuals and magazines in Japan and became widely known there. Thus, by the crisscross play being introduced in manuals and magazines, after 1928, this tactic was adopted by universities and the Japanese national team. It is likely that the adoption of the crisscross play was the first adoption of a continuity offense in Japan.

キーワード：戦術, コンテュニティーオフense, ミーンウェル
Key Words: Tactics, Continuity offense, Walter E. Meanwell

I. 問題の所在

ボールゲームでは、戦術がゲームの遂行において決定的な役割を果たす¹⁾。バスケットボール競技においてもこの例に漏れず戦術が重要な役割を担っており、これまで数多くの戦術が考案されてきた。なかでもスクリーンプレー²⁾は現在

のバスケットボール競技において多用される戦術のひとつであり、チーム戦術を組み立てるうえで欠かせない要素となっている。スクリーンプレーとは、オフenseプレーヤーがディフェンスプレーヤーの進路にポジションをとることで、ディフェンスプレーヤーの進行を妨げるオ

フェンス戦術である。この戦術は 1 人のオフenseプレーヤーを自由にさせ、そのプレーヤーにシュートを打たせることや、パスを受けさせたりするために用いられる³⁾。こうしたスクリーンプレーのなかでも、アウトサイドスクリーンはスピードに乗ったユーザー⁴⁾へのパスとスクリーンが同時に行われるため、相手のディフェンスは対応が難しく、ゴール付近で成功すれば一気にシュートへ持ち込むことができる。このことから、Bリーグの前身である日本バスケットボールリーグ所属トヨタ自動車アルバルクのコーチを務めた Donald Beck は、チームが身につけておくべき戦術のひとつとしてアウトサイドスクリーンをあげている⁵⁾。また、日本バスケットボール協会もアウトサイドスクリーンをオプションも合わせて習得し、チームプレーとして活用することを推奨している⁶⁾。このように、今日の日本のバスケットボール競技においてアウトサイドスクリーンは重要なオフense戦術のひとつとなっている。

さて、大川によるとアメリカで考案されたアウトサイドスクリーンを行うポスト・ピボット・プレーは、クリスクロスパスを使用したショートパス攻撃から誕生したものであるという⁷⁾。このクリスクロスパスを使用したショートパス攻撃とは、パッサーがレシーバーの後ろ、または前を通して交差する動きを、3人以上のプレーヤーが循環的に連続させるクリスクロスを指しており⁸⁾、オフenseプレーヤーの動きが連続的に繰り返されるコンティニュエティーオフenseに分類される⁹⁾。そこで本研究では、今日重要な戦術として認知されているアウトサイドスクリーンの原初形態であるクリスクロスについて検討することにしたい。

ここで、バスケットボール競技の歴史を紐解くと、バスケットボール競技は 1891（明治 24）年 12 月に、アメリカ・マサチューセッツ州スプリングフィールドの国際 YMCA トレーニング・スクールにおいて、James Naismith によって創始された¹⁰⁾。日本では 1913（大正 2）年、日本 YMCA 同盟の体育事業専門主事の派遣要請に応え、アメリカから Franklin H. Brown が来日したことを契機として、バスケットボール競技の本格的な伝播と定着がはじまった¹¹⁾。Brown は、神戸、京都、横浜、東京とそれぞれの YMCA を通じてバスケットボール競技の普及につくしたため、競技移入後の日本のバスケットボール競技は YMCA を中心に行われ¹²⁾、1921（大正 10）年から開催された全日本選手権大会においては、第 1 回から第 3 回大会まで東京 YMCA が 3 連覇を成し遂げた¹³⁾。その後、1925（大正 14）年開催の第 5 回大会での東京 YMCA の優勝を最後に、学生チームの優勝が続き、しだいに日本のバスケ

ットボール競技の本流は、YMCA から大学へと移っていった¹⁴⁾。

日本における競技移入当初の戦術については、及川が昭和初期の日本には、ファストブレイクを主に用いるチームとセットオフenseを主に用いるチームが混在しており、1935（昭和 10）年にはファストブレイクとセットオフenseのどちらも用いる攻撃法へ移っていったことを明らかにしている¹⁵⁾。また、及川によると 1933（昭和 8）年頃の日本は基礎的な技能の水準が低いという実情からオフense戦術であるバリーシステムの導入に行き詰まり、8 の字連続移行法が登場したという¹⁶⁾。さらに、小谷はこの時期のディフェンス戦術であるゾーンディフェンス¹⁷⁾やファイブマン・ツーライン・ディフェンス¹⁸⁾、アサイン・マンツーマンディフェンス¹⁹⁾、オフense戦術であるスリーパー・オフense²⁰⁾やスリーレン・ファストブレイク²¹⁾、オフボールスクリーン²²⁾、そして 5 人でのオフenseの採用過程を明らかにしている²³⁾。しかしながら、いずれの研究においてもクリスクロスについては触れられていない。以上のように、日本におけるバスケットボール競技のクリスクロスについて歴史研究の視点から詳細に検討したものは管見の限り見あたらない。

そこで本研究では、日本のバスケットボール競技におけるクリスクロスに着目し、クリスクロスが採用される直前の日本で求められていたオフense戦術を概観したうえで、クリスクロスの採用過程について明らかにすることにしたい²⁴⁾。

II. クリスクロスの採用以前

詳細は後述するが、日本においてクリスクロスは 1928（昭和 3）年頃に採用された。このクリスクロスが採用される直前の 1920 年代中頃の日本では最大でも 4 人のプレーヤーによるドリブルを多用しないでゴール近辺までボールを進めるオフense戦術が求められていた。

1920 年代末頃に 5 人でオフenseを実施するチームが現れるようになるまでは²⁵⁾、各ポジションの役割は主に、ガードがディフェンス、フォワードがオフense、センターはその両方と、各ポジションの役割が明確に区別されており、状況に応じて 2 人のガードのうち 1 人はオフenseにも参加した²⁶⁾。つまり、1920 年代中頃までは最大で 4 人のプレーヤーがオフenseに参加していた。

バスケットボール競技では、一般にゴールからの距離が近いほどシュート成功率が高くなることから、高確率のシュートを決めるためにゴール近辺でシュートを打つことが求められる。1920 年代中頃の日本においても同様にゴール近

辺でシュートを打つことが求められていたようである。1923（大正 12）年発行の『ATHLETICS』には「偶々ロングシュート（ロングシュート—引用者注）成功して喝采を受けたからつて度々之を試みやうとしたり…如きは最も排斥す可き非チームワーク行為である」²⁷⁾との記述が残されており、1925（大正 14）年発行の『体育と競技』には「日本人は余りなすを良しとせざるロングシュート」²⁸⁾との記述がみられる。また、1927（昭和 2）年発行の『体育と競技』には「ロングシュートでゴールに入る率は近くより行ふものに比すればうんと少い」²⁹⁾との記述が残されている。このように、1920 年代中頃の日本においてもゴール近辺でシュートを打つことが求められていた。しかしながら、小谷によると 1920 年代の日本ではロングシュートを多用するオフェンスが展開されていたという³⁰⁾。この背景には、当時の日本におけるボールやコート等の条件によりドリブルを多用するオフェンス戦術を採用できなかったことがあったようである。

用具および施設の側面から昭和初期までの国内バスケットボール競技におけるドリブル技術について考察した谷釜によると、日本において大正末期から昭和初期頃に誕生した国産ボールは、手縫い製法でつくられたために使用中に変形するという欠点を持っており、ドリブル中のイレギュラーバウンドを避けられないものであった³¹⁾。また競技移入当初バスケットボール競技は、体育館不足に起因して屋外競技として行われたため³²⁾、平坦な状態に保たれていない屋外コートの地面の影響を受け、ドリブル時には予想外の方向にボールが弾んだ³³⁾。このように当時はボールの性能が悪く、さらに平坦でない屋外コートで行われていたため、プレーヤーはボールを視野に入れながら体の正面でつくというドリブルを余儀なくされた³⁴⁾。また、1930（昭和 5）年発行の『指導籠球の理論と実際』を基軸としてバスケットボール競技におけるドリブル技術の防御性と攻撃性について検討した及川によれば、1928（昭和 3）年までのドリブル技術はチーム戦術との関係が薄く、敵競技者からボールを守るという使用法が一般的であった³⁵⁾。以上の研究によって明らかにされた事実により、当時のドリブルの技術水準ではゴール近辺までボールを進めることは困難であり、ロングシュートを多用せざるを得なかったといえる。つまり、クリスクロスが採用される直前の 1920 年代中頃の日本では 4 人のプレーヤーによるドリブルを多用しないでゴール近辺までボールを進めるオフェンス戦術が求められていたとみることができる。

Ⅲ. クリスクロスの認知

日本において 4 人のプレーヤーによるドリブルを多用しないでゴール近辺までボールを進めるオフェンス戦術が求められていた頃、アメリカでは 1924（大正 13）年にウィスコンシン大学コーチである Walter E. Meanwell³⁶⁾によって指導書『THE SCIENCE OF BASKETBALL』が発行された。小谷によると 1926（大正 15）年頃に東京商科大学が採用したファイブマン・ツーライン・ディフェンス・マンツーマン・バリエーションや³⁷⁾、1926（大正 15）年発行の日本の雑誌で紹介されたオフボールスクリーンは『THE SCIENCE OF BASKETBALL』のなかで紹介されているものであったという³⁸⁾。このように、1920 年代後半の日本のバスケットボール競技界は『THE SCIENCE OF BASKETBALL』に掲載されている戦術を参考にしていた。この『THE SCIENCE OF BASKETBALL』のなかで Meanwell はクリスクロスについて図 1 とともに以下のように紹介している³⁹⁾。図 1 では、▲がオフェンスプレーヤーを表しており、実線の矢印が人の動き、点線の矢印がパスによるボールの動きを示している。

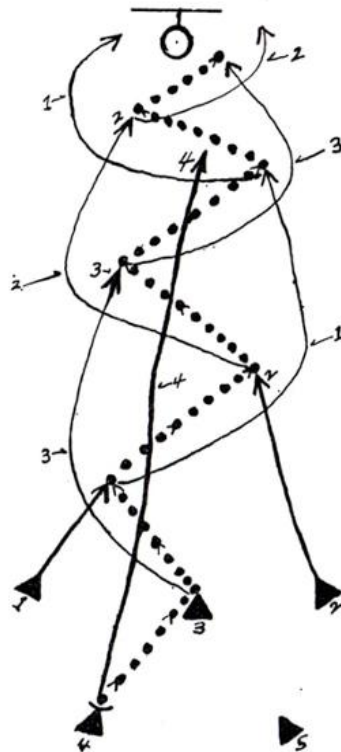


図 1. 『THE SCIENCE OF BASKETBALL』に掲載されたクリスクロス†

† Walter E. Meanwell (1924) *THE SCIENCE OF BASKETBALL*. DEMOCRAT PRINTING COMPANY : WISCONSIN, p.270 より転載

3 人のオフェンスプレーヤーがパスをしなが
ら常に進んでいく。彼等は 1 人が左側、1 人が右
側、1 人が中央に位置し、サイドからサイドへと
常に交差しながら直線的に進み、この 3 人の後
方にあるプレーヤーがフロアガードとなりプレ
ーをバックアップしてゴール近辺へと進行する
（引用者訳）。

このように、『THE SCIENCE OF BASKETBALL』
のなかではバックアップのガードを含める 4 人
でのクリスクロスが紹介されており、『THE
SCIENCE OF BASKETBALL』の発行により日本
のバスケットボール競技界はクリスクロスを認
知することになったといえる。また、『THE
SCIENCE OF BASKETBALL』のなかではクリス
クロスの目的について以下のように記述されて
いる⁴⁰⁾。

このオフェンスの目的は、ゴール近辺でシュ
ートが打てる状態になるまでボールを占有する
ことである。ロングシュートを打たずに、必要で
あればバックパスをし、再び前方にパスをして
ゴール近辺でのシュートが確実に打てる状態に
なるまで素早くパスをするのである（引用者訳）。

このように、クリスクロスの目的はゴール近
辺で確実なシュートを打つことであり、クリス
クロスは日本において求められていた 4 人のプ
レーヤーによるドリブルを多用しないでゴール
近辺までボールを進めることを目的としたオフ
ェンス戦術であったといえる。

Ⅳ. クリスクロスの紹介

クリスクロスが紹介された『THE SCIENCE OF
BASKETBALL』が発行されたことにより、日本
のバスケットボール競技界はこの戦術を認知す
ることになるが、その後、日本の指導書や雑誌
のなかでもクリスクロスが紹介されるようにな
った。

1928（昭和 3）年発行の『籠球コーチ』のなか
では、クリスクロスについて図 2 とともに以下
のように紹介されている⁴¹⁾。図 2 では、○がオ
フェンスプレーヤーを表しており、実線の矢印
が人の動き、点線の矢印がパスによるボールの
動きを示している。

十字の戦法である。ボールは略直線に進むが、
前の 3 人の行動が直角になる様に進むから、敵
がガードし難い。lg（図中 LG——引用者注）は
ボールの後について行く。

このように、『籠球コーチ』のなかで紹介され
たクリスクロスも 4 人のプレーヤーがオフエン

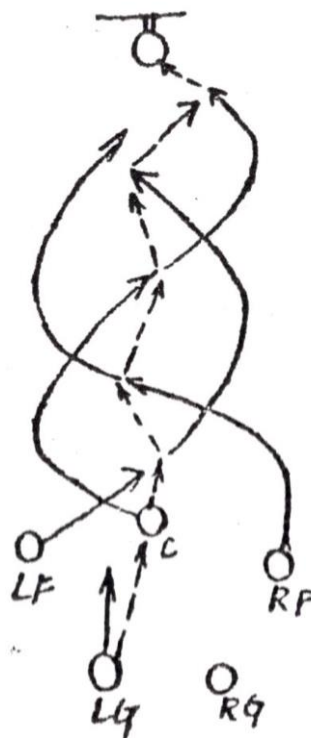


図 2. 『籠球コーチ』に掲載されたクリスクロス†

† 鈴木重武（1928）籠球コーチ。矢来書房：東京，p.185 より転載

スに参加するクリスクロスであった。この『籠球
コーチ』の記述を嚆矢としてクリスクロスは
1928（昭和 3）年以降、さまざまな指導書や雑誌
のなかで紹介されるようになった⁴²⁾。また、1929
（昭和 4）年発行の『ATHLETICS』において早稲
田大学 OB である鈴木重武がクリスクロスの紹
介にあたって「廣く紹介されて居る戦法で讀者
の中には又かと思はれる者もあらう」⁴³⁾と述べて
いることから、1929（昭和 4）年頃には日本にお
いてクリスクロスが広く認知されていたことが
理解できる。

こうしてクリスクロスは日本のバスケットボ
ール競技界に認知されるようになったが、当時
は様々な名称で呼ばれていたようである。『指導
籠球の理論と実際』では、クリスクロスについて
「人によつて名称を異にしている」とし、この戦
術を「交叉法 クリス・クロス」として紹介して
いる⁴⁴⁾。また、鈴木重武は「これ（クリスクロス
—引用者注）はローリングオフフェンス或はク
リスクロスパッシングの攻撃と称し」⁴⁵⁾と述べて
いる。このように、当時の日本においてクリスク

ロス」「ローリングオフフェンス」や「十字の戦法」、「交叉法」などと呼ばれていた。

V. クリスクロスの採用

4 人のプレーヤーによるドリブルを多用しないでゴール近辺までボールを進めるオフフェンス戦術が求められていた日本において指導書や雑誌のなかでクリスクロスが紹介されるようになると、実際にこの戦術を採用するチームが現れるようになった。

大日本バスケットボール協会競技委員を務めた鈴木俊平は、1928（昭和 3）年開催の第 5 回関東大学リーグ戦について「早稲田は攻撃の時クリスクロスパスで進んでいく」⁴⁶⁾と述べており、雑誌『バスケットボール』には 1930（昭和 5）年開催の第 9 回極東選手権競技大会について「大橋、植田、田中のショート、クリスクロスパスがなめらかに廻転します」⁴⁷⁾との記述が残されている。また、『ATHLETICS』では 1931（昭和 6）年開催の第 10 回全日本選手権大会について「2 分成蹊ゴール下の矢にボールを得たる早大は早川、森澤、覚張と素速いクリスクロスパス（クリスクロスパス—引用者注）に進み」⁴⁸⁾との記述がみられ、雑誌『籠球』には 1932（昭和 7）年開催の第 9 回関東大学リーグ戦での東京帝国大学について「相手方の帰陣早く速攻に成功しない時は前線はショートパスに果然クリスクロス攻撃に転じて迅速なパスと動作に、強大な體軀に圧倒し尽すのであつた」⁴⁹⁾との記述が残されている。さらに、日本代表チームのアシスタントコーチを務めた土肥一雄は 1934（昭和 9）年開催の第 10 回極東選手権競技大会について「日本軍の戦法はショートパスを主用しクリスクロスの動きを基調としたプレーを行ふことに決定した」⁵⁰⁾と述べている。実際に、第 10 回極東選手権競技大会に向けた日本代表チームの練習メニューのなかには「クリスクロス・オフフェンス」⁵¹⁾の練習がみられる。このように、日本では 1928（昭和 3）年頃から大学や日本代表チームがクリスクロスを採用するようになり、1929（昭和 4）年発行の『籠球競技法』において「この攻撃方式（クリスクロス—引用者注）は、多くのチームに依つて、用ひられている」⁵²⁾とされるように、日本においてクリスクロスが広く採用された。さらに、クリスクロスが採用される前の日本においてコンティニュエティーオフフェンスが採用されたという記録は管見の限り見当たらないことから、今のところ 1928（昭和 3）年のクリスクロスの採用が日本における最初のコンティニュエティーオフフェンスの採用であった可能性が高い。

VI. まとめ

本研究における検討の結果は、以下のように

整理することができる。

クリスクロスが採用される直前の 1920 年代中頃の日本においてロングシュートを多用するオフフェンスが展開されていた背景には、ボールやコート等の条件によりドリブルを多用するオフフェンス戦術を採用できなかったことがあり、当時の日本では 4 人のプレーヤーによるドリブルを多用しないでゴール近辺までボールを進めるオフフェンス戦術が求められていたとみられる。

その頃、アメリカではウィスコンシン大学コーチである Meanwell によって『THE SCIENCE OF BASKETBALL』が発行され、そこでは、日本において求められていた 4 人のプレーヤーによるドリブルを多用しないでゴール近辺までボールを進めるオフフェンス戦術であるクリスクロスが紹介された。『THE SCIENCE OF BASKETBALL』に掲載されている戦術を参考にしていただいた日本のバスケットボール競技界は、『THE SCIENCE OF BASKETBALL』の発行によりクリスクロスを認知することとなった。

その後、クリスクロスは日本のさまざまな指導書や雑誌によって紹介されるようになり、日本においてクリスクロスが広く認知された。こうして、指導書や雑誌のなかでクリスクロスが紹介されるようになると、1928（昭和 3）年以降、この戦術が実際に大学や日本代表チームによって採用されるようになった。このクリスクロスの採用は日本における最初のコンティニュエティーオフフェンスの採用であった可能性が高い。

【付 記】

本研究は日本運動・スポーツ科学学会 2019 年度（平成 31 年度）石津誠研究助成を受けたものである。

【註および引用・参考文献】

- 1) シュテューラー、コンツァック、デブラー：唐木國彦ほか訳（1993）ボールゲーム指導事典。大修館書店：東京、p.70
- 2) スクリーンプレーの誕生に関して John M. Cooper は「第一次世界大戦前（もしくは数年後）、国の各地域における多くの高校では、学校の体育館を持っていなかった。時々、町のホールや公共のミーティングの場所がバスケットボールコートに変えられた。これらのビルの多くは、プレーするコートにいく列もの支柱がいたるところにある構造になっていた。そのため、プレーヤーたちはこれの障害物を使ったプレーに適合していた。…インドアコートのある寒冷地では、建物の暖房であるストーブがしばしばプレーコートの傍か、もしくは中に位置しており、ストーブを避ける試

- みはプレーヤーにとって必須の技術となっていた。すでに述べたように、体育館として使用されるホールの柱は、何人かのプレーヤーに課題を与えた。例えば、それは柱の一つにぶつかるオフENSEプレーヤーをカバーする試みで、後方に移動しているディフェンスプレーヤーを見るための共通の練習であった。これは、もちろんディフェンスから抜け出すのにオフENSEが使うスクリーンの創作であった。この状況は、プレーヤーとコーチにスクリーンとしてプレーを使用する可能性を意識させることを支援した。これらの 2 つの要因のために、攻撃の戦術の一部としてスクリーンの故意な使用は徐々に増加し、そして発展してきた (1930 年までに良いチームのほとんどが、ディフェンス地域からオフENSE地域にボールを進めてきて、直接ゴールの方に行くことを止められた時にスクリーンを使用した)」
- (John M. Cooper, Dary Siedentop (1975) *The Theory and Science of Basketball SECOND EDITION*. Lea & Febiger : Philadelphia, pp.9-10) と述べている。アメリカでのスクリーンプレーの誕生と発展については大川の論文が詳しい (大川信行 (2007) バスケットボールの戦術に関する歴史的研究 (1891 年から 1945 年まで) —男子アマチュア・バスケットボールを中心として—。日本体育大学博士論文)。
- 3) John M. Cooper, Dary Siedentop (1975) *The Theory and Science of Basketball SECOND EDITION*. Lea & Febiger : Philadelphia, p.91
 - 4) ユーザーとは「スクリーンを利用してカットするプレーヤー」(ジェリー・クロウゼ編, 水谷豊他訳 (1997) バスケットボール・コーチング・バイブル, 大修館書店: 東京, p.550) とされる。
 - 5) ドナルド・ベック (2012) バスケットボールの戦術&トレーニング, 新星出版社: 東京, p.57
 - 6) 日本バスケットボール協会編 (2002) バスケットボール指導教本, 大修館書店: 東京, p.189
 - 7) 大川信行 (2007) バスケットボールの戦術に関する歴史的研究 (1891 年から 1945 年まで) —男子アマチュア・バスケットボールを中心として—。日本体育大学博士論文, pp.386-387
 - 8) 小野秀二・小谷究 (2017) バスケットボール用語事典, 廣済堂出版, p.45
 - 9) 小野秀二・小谷究 (2017) バスケットボール用語事典, 廣済堂出版, p.53
 - 10) 水谷豊 (1980) バスケットボールの歴史に関する一考察 (VI) —James Naismith とオリンピック・ベルリン大会—。青山学院大学一般教育学部会論集, (21) : 153
 - 11) 薬師寺尊正 (1927) バスケットボール, アルス文化大講座, 4 : 7
 - 12) 近藤茂吉 (1921) バレーボールとバスケットボール, 運動界, 2 (4) : 65
 - 13) このことに関連する史料として以下のものがあげられる。
 - ・荒木直範 (1922) バスケットバレーボール大会印象記, *ATHLETICS*, 1 (5) : 35-37
 - ・日本バスケットボール協会広報部会編 (1981) バスケットボールの歩み, 日本バスケットボール協会, p.614
 - ・西村正次 (1923) バスケットボール代表権は東京青年会組に帰す, *ATHLETICS*, 2 (4) : 132-139
 - 14) 薬師寺尊正 (1927) バスケットボール, アルス文化大講座, 4 : 7-8
 - 15) 及川佑介 (2008) オリンピック・ベルリン大会 (1936 年) における日本バスケットボールに関する史的研究, 運動とスポーツの科学, 14 (1) : 52
 - 16) 及川佑介 (2009) 昭和初期における我が国バスケットボールの競技力向上過程に関する研究—松本幸雄と『籠球研究』(昭和 9 年~昭和 11 年) を中心として—。国士舘大学博士論文, p.115
 - 17) このことに関する研究として以下のものがあげられる。
 - ・小谷究 (2014) 日本のバスケットボール競技におけるゾーンディフェンスの導入過程に関する史的研究 : Franklin H. Brown が紹介した 3-2 ゾーンディフェンスに着目して, スポーツ史研究, (27) : 1-16
 - ・小谷究 (2016) 日本のバスケットボール競技におけるゾーンディフェンスの採用過程に関する史的研究 (1930 年代~1940 年代初期) : オフENSEとディフェンスとの相関関係に着目して, 身体運動文化研究, 21 (1) : 1-12
 - 18) 小谷究 (2014) 日本のバスケットボール競技におけるファイブマン・ツーライン・ディフェンスに関する史的研究, 体育学研究, 59 (2) : 497-511
 - 19) 小谷究 (2014) 日本のバスケットボール競技におけるアサイン・マンツーマンディフェンスの採用過程に関する研究 (1920 年代後半—1930 年代前半), 運動とスポーツの科学, 20 (1) : 13-22
 - 20) 小谷究 (2013) 1920 年代の日本におけるバスケットボール競技のファストブレイクに関する史的研究 : スリーパー・オフENSEの採用と衰退に着目して, 運動とスポーツの科学, 19 (1) : 67-79
 - 21) 小谷究 (2015) 日本のバスケットボール競技におけるファストブレイクに関する史的研究 : 1930 年代のルール改正とコートの大さに着目して, バスケットボール研究, (1) :

- 1-10
- 22) 小谷究 (2015) 日本のバスケットボール競技におけるオフボールスクリーンの採用過程に関する研究. 運動とスポーツの科学, 21 (1) : 1-11
- 23) 小谷究 (2015) 日本のバスケットボール競技におけるオフense参加人数に関する史的 research (1920 年代初期~1930 年代初期) : 5 人でのオフenseの採用過程に着目して. 東京体育学研究, 6 : 15-21
- 24) 本文中の引用文における漢字、仮名づかい、送りがなは、原則的に原文のままとするが、文献のタイトルの漢字は、常用漢字に改め、漢数字は算用数字に変換して記す。
- 25) 小谷究 (2015) 日本のバスケットボール競技におけるオフense参加人数に関する史的 research (1920 年代初期~1930 年代初期) : 5 人でのオフenseの採用過程に着目して. 東京体育学研究, 6 : 19
- 26) 小谷究 (2014) 日本のバスケットボール競技におけるゾーンディフェンスの導入過程に関する史的 research : Franklin H. Brown が紹介した 3-2 ゾーンディフェンスに着目して. スポーツ史研究, (27) : 3-4
- 27) 荒木直範 (1923) バスケットボール講話 (9). ATHLETICS, 2 (5) : 63
- 28) KY 生 (1925) 立教大学籠球部上海遠征記 (続). 体育と競技, 4 (4) : 79
- 29) 元原利一 (1927) フアイヴメンデフェンスの攻撃に就て. 体育と競技, 6 (1) : 64
- 30) 小谷究 (2013) 1920 年代の日本におけるバスケットボール競技のファストブレイクに関する史的 research : スリーパー・オフenseの採用と衰退に着目して. 運動とスポーツの科学, 19 (1) : 70-71
- 31) 谷釜尋徳 (2008) 日本におけるバスケットボールの専用球の改良とそれに伴うドリブル技術の発達に関する技術史的考察. スポーツ運動学研究, (21) : 56
- 32) 谷釜尋徳 (2009) 日本におけるバスケットボールの競技場に関する史的考察一大正期~昭和 20 年代の屋外コートの実際に着目して. スポーツ健康科学紀要, (6) : 35
- 33) 谷釜尋徳 (2009) 日本におけるバスケットボールの競技場に関する史的考察一大正期~昭和 20 年代の屋外コートの実際に着目して. スポーツ健康科学紀要, (6) : 36
- 34) 谷釜尋徳 (2008) 日本におけるバスケットボールの専用球の改良とそれに伴うドリブル技術の発達に関する技術史的考察. スポーツ運動学研究, (21) : 56
- 35) 及川佑介 (2005) 初期バスケットボール競技におけるドリブル技術の防御性と攻撃性一李想白著『指導籠球の理論と実際』(昭和 5 年)を基軸として一. 体育・スポーツ科学研究, (5) : 18
- 36) 1930 年代から 60 年代にかけてアメリカの大学コーチとして活躍した John W. Bunn は、初期の代表的なコーチとして Meanwell をあげている (John W. Bunn (1961) THE BASKETBALL COACH : Guides to Success. Englewood Cliffs, N. J. : Prentice-Hall, p.4)。
- 37) 小谷究 (2015) 日本のバスケットボール競技におけるファイブマン・ツーライン・ディフェンスに関する史的 research. 体育学研究, 59 (2) : 504
- 38) 小谷究 (2014) 日本のバスケットボール競技におけるオフボールスクリーンの採用過程に関する research. 運動とスポーツの科学, 21 (1) : 5-6
- 39) Walter E. Meanwell (1929) THE SCIENCE OF BASKETBALL . DEMOCRAT PRINTING COMPANY : WISCONSIN, p.269
- 40) Walter E. Meanwell (1929) THE SCIENCE OF BASKETBALL . DEMOCRAT PRINTING COMPANY : WISCONSIN, p.267
- 41) 鈴木重武 (1928) 籠球コーチ. 矢来書房, p.184
- 42) このことに関連する史料として、以下のものがあげられる。
・長田博 (1928) バスケットボール誌上コーチ. 体育と競技, 7 (10) . 75
・鈴木重武 (1929) 攻撃システムの研究 (4) . ATHLETICS, 7 (10) : 16-17
・李想白 (1930) 指導籠球の理論と実際. 春陽堂, pp.439-574
- 43) 鈴木重武 (1929) 攻撃システムの研究 (4) . ATHLETICS, 7 (10) : 16-17
- 44) 李想白 (1930) 指導籠球の理論と実際. 春陽堂, p.439
- 45) 鈴木重武 (1929) 攻撃システムの研究 (4) . ATHLETICS, 7 (10) : 16
- 46) 鈴木俊平・野村瞳・小野道彦・田中寛二郎・富田毅郎・薬師寺尊正 (1929) 7 大学籠球リーグ戦合評. ATHLETICS, 7 (1) : 98
- 47) 薬師寺尊正 (1930) 第 9 回極東籠球選手権競技. バスケットボール, 創刊号 : 7
- 48) 浅野延秋 (1931) 第 10 回全日本バスケットボール選手権大会. ATHLETICS, 9 (3) : 119
- 49) 土肥一雄 (1933) 東京大学リーグ戦評. 籠球, (6) : 61
- 50) 土肥一雄 (1934) 第 10 回極東大会報告. 籠球, (10) : 4
- 51) 池上虎太郎 (1934) 代表選手第 2 期練習日記に代へて. 籠球, (10) : 37
- 52) 安川伊三 (1929) 籠球競技法. 目黒書店 : 東京, p.202